

一方、諫早湾で昭和50年及び昭和60年に行われた底質調査の調査位置を図-2・4・5に、調査結果を表-2・4・1～2・4・4に示す。

諫早湾の底質は、湾奥から湾中央にかけてシルト質粘土におおわれており、湾口付近では細粒砂に変化する。

底質の性状は、諫早湾々口部から湾奥部に向かうに従い砂質からシルト質に変化する傾向を示し、この性状の変化とともに表-2・4・1、2・4・3に示すように有機物量の指標となるCOD、硫化物、強熱減量などが増加する傾向がみられる。

栄養塩類の溶出についてみると、表-2・4・2に示すようにT-Pの溶出量は、5.4～9.9 mg/Lと地点間で差はみられないが、T-Nは諫早湾北部で10～40 mg/L、南部で5 mg/L前後と溶出量に差が生じている。

重金属等は、汚染を受けていない地殻中の値である表-2・4・5に示すクラーク数と比較して、Cd、Pbは同レベルでありZnで上廻る値が認められている。

溶出試験はすべて定量限界以下であった。

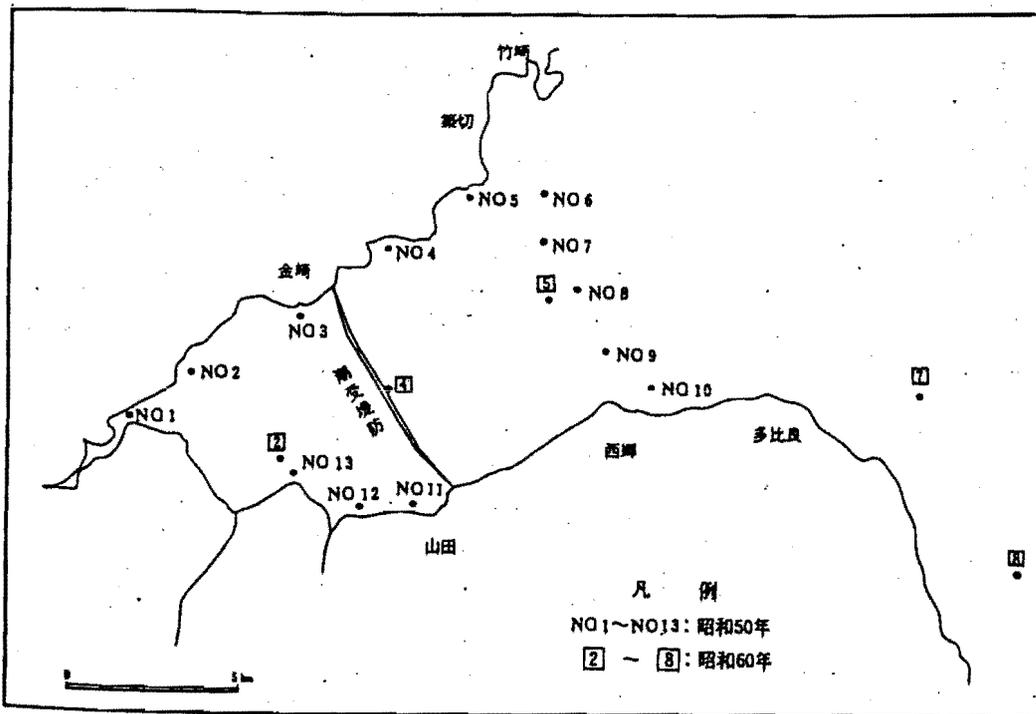


図-2・4・5 諫早湾における底質調査位置図

表-2.4.3 昭和60年底質分析結果(一般・栄養塩類)

項目	調査地点	2	4	5	7	8
泥色		オリーブ黒	オリーブ黒	オリーブ黒	灰オリーブ	灰オリーブ
泥温(℃)		8.6	9.1	9.1	10.6	10.6
比重		2.623	2.696	2.662	2.741	2.669
中央粒径(mm)		0.020	0.017	0.024	0.360	0.420
pH		7.7	7.9	8.2	8.3	8.3
COD(mg/g)		7.3	7.4	5.0	1.2	0.8
硫化物(mg/g)		0.01	0.0002	0.007	0.01	0.001
強熱減量(%)		3.5	3.6	3.8	2.1	1.8
T-N(mg/kg)		500	1500	900	900	800
T-P(mg/kg)		730	770	930	430	400

(注) 分析法は「総理府令6」昭和48年2月17日に準じた。

表-2.4.4 昭和60年底質分析結果(金属等項目)

項目	調査地点	4	
	各試験	含有量試験(mg/kg)	溶出試験(mg/l)
R-Hg		ND	ND
T-Hg		ND	ND
Cd		0.5	ND
Pb		21	ND
O-P		ND	ND
Cr(VI)		ND	ND
As		3	ND
CN		ND	ND
PCB		ND	ND
Cu		21	ND
Zn		140	ND
F		97	ND

(注) 分析法は「底質調査方法」環境庁昭和50年10月に準じた。

表-2.4.5 クラーク数

元素	Fe	Mn	Cr	F	Cu	Zn	Pb	Cd	Hg	As
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
含有量	4.68	0.108	0.062	0.030	0.010	0.004	0.002	0.00005	0.00002	0.0005
	mg/g	mg/kg	mg/kg	mg/kg						
	46.8	1,080	620	300	100	40	20	0.5	0.2	5

資料：地質学ハンドブックによる